

「エルサレム教会の信徒たち」

2016年02月24日

使徒言行録2章43節～47節。すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業としるしが行われていたのである。信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして、毎日ひたすら心をつにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。

聖霊に押し出されて語ったペトロの説教に群衆は心を打たれ、ナザレのイエスを主キリストと信じ、洗礼を受けた人が三千人ほどもいた。聖霊降臨日に信仰を同じくする最初のエルサレム教会が誕生し、代々の教会の母なる教会となった。その教会に集まった信者たちの信仰生活が、上記のように描かれている。

使徒たちは多くの不思議な業と徴を行ったので、全ての人々は恐れを抱いた。これは恐怖ではなく、生きて働かれる神への畏れであろう。信者たちは心をつにし、財産や持ち物を売り払い、全てを共有し、各々の必要に応じて分かち合う原始共有制の群れを形成した。歴史の中には、この共同体を理想として、同じような共同体形成を目論んだ例は多々ある。イスラエルで作られた「キブツ」は共有制だけでなく、共産性も取り入れた典型的な例であるが、現在は、有用に機能していないと聞く。これらの試みは失敗に終わったというのが実情である。共有、共産主義は理想であるが、人は自由を求める根源的な願望を持っているということであろう。なぜ、エルサレム教会は共有制を取ることができたのか。主イエスがすぐに再臨し、歴史の終りが来るという緊迫した終末信仰が可能にしたものと思われる。現在でも時々、主イエスの再臨による終末は何年何月何日に来ると語り、信じた人々から全財産を没収したというカルト宗教の話聞くことがある。歴史の終末は天使も人も知らない、神の決定事項である。希望において、待つということである。

信者たちはエルサレム神殿に参り、ひたすら祈りを捧げた。家ごとに集まり、喜びと真心をもって、パンを裂き、食事を共にした。彼らは絶えず神を賛美し、互いを受け入れ、愛し合った。民衆は、彼らの信仰生活に好意を寄せ、日々仲間は増えていった。神は救われる人々を加え、エルサレム教会は大きく成長していった。主イエスを信じ、愛と真実を生きる信者たちの生き生きした姿を伝えている。

使徒信条に「我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会（を）…信ず」と告白されている。私は岳父・菊池吉弥牧師に神学生時代と伝道師時代に薫陶を受けた。菊池牧師から「教会を愛する」信仰を徹底して教えられた。私は幾多の失敗や挫折を経験したが、教会を第一義に考え、対処してきたつもりでいる。教会はどんなに破れていても、主イエスが現臨し、聖霊の導きの中にある。教会も人が集まる群れであるから、悪や罪に陥る。エルサレム教会においても過ちや偽りがあった。日本基督教団の歴史においても、キリスト教信仰よりも、皇国史観を優先させ、天皇を崇め、戦争協力に走った罪を犯した。現在の教団の教会においても、私には考えられない悩ましい諸問題が起こっている。悲しい思いにさせられることは少なくない。しかし、その現実のただ中に、復活したキリストが聖霊において現臨され、私たちは赦されて、福音に生きよ、宣教せよと導かれている。それを信じることが、使徒信条で告白する「教会を信じる」である。